

第50回 在宅ケアネット渋川

講演会レポート

〔日時〕 2月7日(木) PM19:00～PM20:30 〔会場〕 プレヴェール渋川

(演題) 在宅緩和ケア ～ケアタウン小平チームの取り組み～

(講師) ケアタウン小平クリニック 院長 やまざき ふみお 山崎 章郎 先生



職 種	人数(人)
医師、歯科医師、薬剤師	17
看護師・保健師	53
介護職	15
PT/OT/ST	5
ソーシャルワーカー	18
ケアマネジャー	11
栄養士	3
歯科衛生士	3
事務(行政含む)	7
その他・民生委員他	5
合計	137



〔参加者の感想 (一部抜粋)〕

☆在宅緩和ケアに対する先生の思いがよくわかった。身近な所にこのようなチームがあれば最後まで安心して自宅で生活できると思う。

☆ケアタウン小平の取り組みには驚いた。すばらしい。

☆渋川でも同じような取り組みができればいいと思う。

☆自分の家族が終末期をむかえたらきちんと話し合おうと思った。

☆1つ1つの対応がきめ細かく家族の思いやご本人の本当の気持ちを聞き出す会話など参考になった。

☆死に対して自分でも見つめる機会になり親を在宅で看取りたいと思った。

☆緩和ケアは患者さんだけでなく家族のサポートも必要なことであると学んだ。

☆ケアタウン小平に入居したいと心から思った。

「在宅ホスピス」という仕組み

山崎章郎
Yamazaki Haruo

新潮選書

Shincho Senshu

現在発売中です。
書店などでお買い求めください。

新潮選書
定価1300円+税



- 第1章 2025年問題とは何か
- 第2章 我々はどうやって死ぬのか
- 第3章 終末期がんの苦痛症状と対処法
- 第4章 初めてのホスピス立ち上げ
- 第5章 ボランティアの大切さ
- 第6章 ケアタウン小平チーム誕生
- 第7章 家で死ぬということ
- 第8章 ホームホスピスという解決法
- 第9章 変えることのできない現実で苦しむ人への支援
- 第10章 死にいくことの緊張体験
- 第11章 実情に即していない課題
- 第12章 答えは現場の実践から生まれる

目次より

ベストセラー『病院で死ぬということ』から28年かけてたどり着いた答え。患者さんとのエピソードなどを通して「住み慣れた街の在宅で、尊厳を持ちながら、最期まで自分らしく生きて逝く」ヒントが、ここにあります。



ケアタウン小平に關しましては、
『ケアタウン小平クリニック』で検索してください
(所在地：小平市御幸町 131-5)

山崎 章郎 先生

著書のご紹介

.....

『病院で死ぬということ』

(日本エッセイストクラブ賞受賞)

主婦の友社 1990

『ここが僕たちのホスピス』

東京書籍 1993

『僕が医者として出来ること』

講談社 1995

『僕のホスピス 1200 日 自分らしく生きるということ』

海竜社 1995

『家で死ぬということ』

海竜社 2012

『「そのとき」までをどう生きるのか』

春秋社 2018

「ホスピスチームが、ホスピスで待っているのではなく、地域に出よう。」



「ケアタウン小平チームが目指すことは
最期まで住みたいコミュニティを創ること」

「最期まで在宅で平穏に過ごしたいと望むので
あれば『在宅ホスピス』という形で実現可能です。」

